

平成28年度
大規模肉用牛経営動向に関する調査報告書
【要約版】



平成29年3月
独立行政法人農畜産業振興機構

【要約版】

1 平成 27 年度の経営概況

(1) 飼養頭数

■平成 27 年度の肥育牛飼養頭数規模別の経営体数の分布は、「200～300 頭未満」16.5%、「300～500 頭未満」13.6%、「500～1,000 頭未満」17.8%、「1,000～1,500 頭未満」7.4%、「1,500～2,000 頭未満」6.6%、「2,000～3,000 頭未満」6.6%、「3,000 頭以上」5.8%であった。

■品種別肥育牛飼養頭数規模別経営体の割合は、黒毛和種が「200 頭以上」で 68.5%、交雑種が「200 頭以上」で 79.1%、乳用種が「200 頭以上」で 66.2%となった。平均頭数は、黒毛和種が昨年度：446.4 頭、今年度：454.1 頭。交雑種が昨年度：649.1 頭、今年度：712.6 頭。乳用種が昨年度：701.0 頭、今年度：722.9 頭。調査対象一戸あたりの飼養頭数は拡大した。

(2) 経営土地面積、畜産用地

■肥育牛飼養頭数規模別の 1 経営体当たりの経営土地面積（平均）は、200 頭以上の経営体が 38.5ha、畜産用地は、200 頭以上の経営体が 47.1ha であった。

(3) 経営形態

■畜産専業・兼業の状況は、200 頭以上の経営体では「畜産専業」73.7%、「複合経営」12.0%、「兼業経営」12.6%であった。

■経営形態は、200 頭以上の経営体では、「肥育専業経営」が 51.4%、「繁殖・肥育一貫経営」が 18.1%、「乳肉複合経営」が 5.1%、「育成・肥育経営」が 20.3%等となっている。飼養規模の大きい経営体の方が肥育専業経営の割合が高い傾向にある。

(4) 売上高

■農業経営体全体の売上高は、200 頭以上の経営体では、平均 7 億 3,100 万円となっている。昨年度の 200 頭以上の経営体の平均売上高 5 億 6,400 万円と比較すると、増加した。枝肉価格の上昇が背景にあると思われる。

■肉用牛関連の売上高は、200 頭以上の経営体では、平均 6 億 600 万円となっている。昨年度の 200 頭以上の経営体の平均売上高 4 億 6,400 万円と比較すると、増加した。枝肉価格の上昇が背景にあると思われる。

(5) 労働力

- 肉用牛関連に従事する家族労働力は、200 頭以上の経営体では平均 3.0 人であった。
- 肉用牛関連の正社員は、200 頭以上の経営体では平均 7.0 人であった。
- 肉用牛関連の非正社員は、200 頭以上の経営体では平均 3.1 人であった。
- 肉用牛関連作業における 1 日当たりの平均労働時間は、200 頭以上の経営体では 7.6 時間であった。
- 従業員の労働時間の長さについての意識は、全体で「とても長い方だ」が 1.8%、「まあ長い方だ」が 18.7%、「どちらともいえない」が 54.2%、「短い方だ」が 25.3%となり、経営体の規模による大きな差異は見られない。

2 生産費（肥育牛 1 頭あたり）

- 品種別に見ると、200 頭以上の経営体では、黒毛和種 1,072,392 円（昨年度 954,286 円）、交雑種 740,816 円（昨年度 691,664 円）、もと畜費等の高騰の影響を受けて、生産費は上昇傾向にあり、黒毛和種の実産費は 1 頭あたり 100 万円台に達している。乳用種 467,673 円（昨年度 470,904 円）となっている。

<生産費（肥育牛 1 頭あたり）> 200 頭以上の経営体

	もと畜費 (円)	購入飼料費 (円)	牧草・放牧・採草費 (円)	敷料費 (円)	光熱水道力費 (円)	消耗諸材料費 (円)	獣医師料及び医薬品費 (円)	賃借料及び料金 (円)	物件税及び公課諸負担 (円)	建物費 (円)	自動車費、農機具費 (円)	生産管理費 (円)	労働費 (円)	支払利子 (円)	支払地代 (円)	副産物価額 (円)	生産費 (円)
黒毛和種	596,839	278,113	34,143	13,544	13,757	7,702	12,906	9,909	7,674	24,417	12,464	8,487	41,206	12,867	7,282	8,917	1,072,392
交雑種	308,102	252,763	31,707	12,253	12,417	6,930	11,873	9,197	7,249	21,948	11,436	8,145	37,681	11,676	6,835	9,395	740,816
乳用種	155,409	207,471	13,205	11,688	7,863	3,794	9,271	5,552	4,079	12,088	8,303	3,262	22,553	6,395	3,994	7,255	467,673

3 もと畜の導入状況

- もと畜の年間外部導入頭数は、「黒毛和種」が 315 頭（昨年度 315 頭）、「交雑種（初生牛）」が 489 頭（昨年度 462 頭）、「交雑種（子牛）」が 619 頭（昨年度 429 頭）、「乳用種（初生牛）」が 723 頭（昨年度 590 頭）、「乳用種（子牛）」が 922 頭（昨年度 602 頭）となっている。もと畜の導入頭数が増えたのは、調査対象一戸あたりの規模拡大が背景にあると思われる。
- 1 頭当たりの導入価格は、「黒毛和種」が 582,972 円（昨年度 490,163 円）、「交雑種（初生牛）」が 211,566 円（昨年度 162,835 円）、「交雑種（子牛）」が 304,670 円（昨年度 263,080 円）、「乳用種（初

生牛)」が59,528円（昨年度46,440円）、「乳用種（子牛）」が154,544円（昨年度128,517円）、である。繁殖雌牛の減少によって、もと畜価格が高騰したことが背景にあると思われる。

■もと畜を外部から導入する際に重視する点は、黒毛和種は、「血統」「価格」「健康状態」「体型の良し悪し」「発育状態」が上位となっている。交雑種は、「健康状態」「価格」「発育状態」「血統」「体型の良し悪し」、乳用種（初生牛）は、「健康状態」「価格」「発育状態」「体型の良し悪し」が上位であり、事故リスクを避けるため、昨年度よりも「健康状態」「発育状態」「体型の良し悪し」を重視する傾向が強まったと思われる。乳用種（子牛）は、「健康状態」「発育状態」「体型の良し悪し」「価格」が上位となっている。

4 肥育牛の出荷状況

■黒毛和種の年間出荷頭数は、200頭以上の経営体で平均459頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で2,351円/kg、相対取引で2,282円/kgとなっており、市場出荷と相対取引の価格差はほとんど見られない。

■交雑種の年間出荷頭数は、200頭以上の経営体で平均767頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で1,449円/kg、相対取引で1,494円/kgとなっている。黒毛和種と同様に、交雑種でも市場出荷と相対取引では、大きな価格差は生じていない。

■乳用種の年間出荷頭数は、200頭以上の経営体で平均997頭である。枝肉単価の平均は、市場出荷で972円/kg、相対取引で995円/kgとなっており、価格差はほとんど見られない。

■年間の副産物（きゅう肥）の状況は、200頭以上の経営体で、平均年間販売数量が1,831トン、金額が741万円となっている。

■市場出荷の実施は、200頭以上の経営体で平均4.6割、相対取引の実施は、平均5.5割となっている。飼養規模の大きな経営体は、相対取引の実績が多い。相対取引の相手先は「法人」が8割であり、地域も「県内」が多い。

5 繁殖雌牛の種付状況

■黒毛和種の主な種付方法は「人工授精」であり、受胎率は78.5%となっている。

■乳用種の主な種付方法は「人工授精」であり、受胎率は50.8%となっている。交雑種の種付方法は「受精卵移植」であり、受胎率は68.7%となっている。

6 飼料の給与状況

- 給与している飼料は、200 頭以上の経営体では「成畜用配合飼料」、「稲わら」、「大麦」、「とうもろこし」、「ふすま」、「イタリアンライグラス」等が上位となっている。
- 肥育牛の給与状況（1 日あたりの 1 頭への給与量）を見ると、肥育前期では 8.1kg、肥育中期では 9.9kg、仕上げ期では 9.7kg となっている。

7 敷料の使用状況

- 敷料については、「おが粉」が圧倒的に多く、200 頭以上の経営体の使用率は 89.0%となっている。ただし、近年は住宅着工件数の減少や輸入製材の増加等により、「おが粉」は入手しづらい状況にあり、将来的には、他の敷料の使用が増加するケースも考えられる。

8 取り組んでいる経営努力

- 200 頭以上の経営体が現在行なっている経営努力は、「低価格な飼料調達に努めている（65.3%）」「機械化を積極的に進めている（56.0%）」「もと畜を低コストで導入する（42.0%）」「従業員の安全を確保（40.0%）」「低価格の敷料調達に努めている（36.0%）」等が多い。
- 今後 3 年間の経営展開について、200 頭以上の経営体では「増頭」が 30.6%、「現状維持」が 63.9% であり、「減少」「生産しない」が 5.6%となっている。
- 増頭する理由は、「出荷先があるため」がもっとも多く、約 4 割を占めている。規模拡大への課題について、200 頭以上の経営体では「資金繰り（69.8%）」「施設・機械の更新・拡大（66.0%）」「子牛の導入価格・販売価格の動向（58.5%）」「肥育牛の販売価格の動向（58.5%）」「土地面積の拡大（52.8%）」「後継者・人材確保、育成（43.4%）」等である。昨年度は、「後継者・人材確保、育成」が 200 頭以上の経営体で 30.8%であったが、今年度は 43.4%と増加。産業界全体で人材難が問題となっているが、肉用牛経営も後継者問題・人材不足の問題となっている。
- 一方、経営規模を「現状維持」「減少する」理由は、「もと牛価格の高騰」が圧倒的に多く、60%以上を占めている。